

【寄稿】

## 谷本先生の思い出

甲 地 利 恵

2009 (平成 21) 年 7 月 19 日、谷本一之先生が向こうへ旅立たれた。

その月の 4 日に登別市で「知里真志保を未来に」というフォーラム (主催: 北海道アイヌ協会登別支部、知里真志保を語る会) があつた。先生も講演なさる\*というので、久しぶりに先生のお話が聴けると思い、会場の客となつていた。壇上の先生の声は相変わらず穏やかでお優しかったが、何となく滑舌が悪いとでもいうか、いつもの先生のように微かな違和を感じた。何となく、不安に思った。休憩時間に、ちょっとご挨拶申し上げようと思つてお探したが、ご自分の出番がお済みになるとすぐにお帰りになつたらしい。のちにご家族に伺つたところによると、登別から帰つてすぐに入院されたという。恩師である知里真志保博士の記念フォーラムということで、不調を押してお出かけになつたものか。

周りにあれこれと気遣いをさせることを慮つて、ご自分の病気のことはご家族以外には一切知らせていなかったと後で聞いた。ご家族のお辛さはいかばかりであつたらうか。

それまでにも、たまにお会いすると何だか痩せてしまわれたと感じるのは私ばかりではなかつたようだ。おそろおそろご体調を尋ねたこともあつたが、先生はいたずらっぽい笑みを浮かべて「僕は意志が強いからね、ダイエットに成功したんだよ」と明るくおっしゃつていた。それを 100% 真に受けたわけではなかつたが、ご本人にそう言われては、希望的観測を込めて信じるしかなかつた。

今にして思えば、4 月に小半時ほど理事長室を訪ねたのがお会いした最後、6 月に用事でお電話をいただいたのがお話しした最後になつてしまった。

理事長室へは、担当した調査報告書が出来上がったので、報告がてら持参して伺つたのだつた。先生はパラパラとめくつて、笑いながら一言「相変わらず細かいことを」。ああ、先生には隠せない、見抜かれているな、と身が縮まつた。咎めるでもなく肯定するでもない、穏やかな短い一言であつた。



北大でのシンポジウムで講演する谷本先生 (2006 年 9 月)

それから、短い時間であつたがいろいろなこととお話くださった。これから出かける予定の調査のこと、アイヌ語やアイヌ芸能のことでお考えになっていることやこれから期待していることなど、さくばらんにお話ししてくださった。もっとお話を聞いておきたかつた。

大学 3 年で先生のゼミに入り、他のゼミ員とともにご指導いただいて以来、20 年以上が経っている。卒業後も何かとお世話になり、行き詰

っては相談申し上げ、ご助言をいただいていた。いつもの確な一言をくださった。刻苦勉励するような動的な言葉ではなくて、考えすぎて身動きがとれないでいる硬さをふっとリラックスさせ、思考の転換の糸口を示してくださるような発想と、印象的な言葉をお持ちで、それを惜しみなく周囲に与えてくださった。

先生の講義を最初に受けたのは大学1年のときだった。専門科目ではなく、一般教養科目として通年で開設されていた「音楽」の、後期半分を先生が担当されていた。

高校時代からばくぜん民族音楽学というものに興味関心はあったものの、ピアノを習っていてやめるのももったいないから音楽教師になろうという極めて単純な動機で、私は教育大学を受験した。恥ずかしいことだが、その大学に谷本先生という民族音楽学の教授がいることすら知らずに入学したのだった。後期の「音楽」第一日目の講義を受けて「この大学に入ってラッキー！」と単純に喜んだ粗忽者だった。良き師のもとで学べる運を「師運」とでも呼ぶならとんでもなく大きな師運であり、運の大きさに見合わぬちっぽけな身の程の私であった。

その講義は音楽科以外の学生も受講するため専門的な内容ではなかったが、さまざまな音楽のあり方を通して人間の営みというものに思考を導いていくような、先生の一貫したテーマを底流に、毎回刺激に富んだ、次回が待ち遠しくなる内容の講義だった。話題は毎回いろいろなジャンルや国、民族に及んだ。シャンソン、ロマの音楽、アイヌ音楽、台湾の先住民の音楽、シヨスタコーヴィチ、社会主義体制下の音楽、宮城道雄、武満徹、西洋と日本、クラシックの中の「エキゾティズム」、…一見アトランダムなこれらの題材が、先生によって「音楽と社会と人間の関係」というテーマに収斂し、また拡大していった。当時のノートをめくると、教育大の旧校舎の大教室で、冬の寒い室内に先生の声が響く、あの静謐な空間を思い出す。

音楽科の専門科目としては、先生は3年生以降で受講する授業を担当されていたので、一般教養科目の「音楽」受講からしばらくは先生の授業を受講する機会がなかった。先生の講義される「音楽学」を楽しみにしていた。

だが、当時の先生はカナダ、アラスカ、グリーンランドを精力的に駆け回っていた。休講がよく続いた。休暇前や年度末に、まとめて集中講義なさることもよくあった。4年生の時の「音楽学(三)」のノートは、教育実習で学生がいなくなる期間と重なったこともあって、日付が数えるほどしか記されていない。長いフィールドワークから戻られると、先生は授業やゼミで「こんどの調査ではね」と、記憶もまだ新しいフィールドでの体験を学生達に聞かせてくださった。皆、それが楽しみであった。

当時の音楽科では、3年生から卒業までの2年間いずれかのゼミナールに所属し、年度末の研究発表を行うことで卒論の単位とする、というような形になっていた。3年になったらどのゼミに入るかと、いろいろ先輩から情報を聞いては学生同士であれこれ思案していた。私は迷わず「谷本ゼミ」にエントリーした。

谷本先生のゼミは人気が高かった。もっとも学生の側は、民族音楽学に興味があるからというよりは、「あのゼミに入ると歓迎会でうまいものを食べるらしい(先生が食通でおいしい店をたくさん知っているから)」という、文字通りおいしいイベント情報と、それに尾ひれが付いて、いつの間にか「あのゼミでは毎回ケーキが食べられる」ということになっていたからかもしれない。ケーキは毎回ではなかったが、何かしら軽なお菓子は常にあった。「これがうまいんだよ」とお気に入りのお菓子をゼミ員に差し入れてくださることもよくあった。

ゼミでは年に一度、現地調査を行うことが通例となっていた（‘ゼミ旅行’という物見遊山的な通称で皆呼んでいた）。私がゼミに在籍していた当時は東北民謡と北海道民謡の比較をテーマにしていたこともあり、青森県へ出かけた。真冬の雪深い時期、私たちの他には待合客もほとんどいないローカル線のプラットホームの風景が記憶に残っている。1両しかない車両の中で、先生は私が買ったばかりのウォークマン（当時はカセットテープ用である）に興味を示され「どれどれ、ちょっと貸して」と、ヘッドフォンを当ててしばらく聴いていらした。

当時弘前大学の教授をなさっていた笹森建英先生のご助力もあり、私達のゼミは苦勞らしい苦勞もせず録音やインタビューを終え、夜は弘前の民謡酒場で、おいしい郷土料理と、津軽三味線の山田千里さんのすばらしい演奏とを堪能した。

このゼミ旅行での雑談でだったと思うが、「僕は布団の中でじっとしているのが嫌い」とおっしゃったことを鮮明に覚えている。何でも、目が覚めて意識があるのにじっとして動かない状態というのがお嫌いだと言うのだ。寒い朝など、いつまでもぐずぐずと暖かい布団の中でまどろむ心地よさを疑いもしなかった私達学生は、一斉に「えーっ」と感嘆の声を上げたものだった。先生のフットワークの軽さは朝起きられた瞬間からなのだなあ、と思った。

どんな学生にも隔てなく接され、学生からも慕われていた先生は、ご自分からあれこれ手取り足取り指導するというタイプではなかった。だが、ひとたび学生の側から申し出て相談すると、本当に親身に色々、的確にご助言くださった。音楽科の学生は、仲間内では敬愛と尊敬をこめて「谷やん」と愛称で呼んでいたものだった。

私が卒業した後のゼミでは、沖縄民謡を研究テーマにしたとのことで、卒業生ながら私も‘ゼミ旅行’に同行させてもらったことがある。このときの思い出は先生も文章に書かれている（「『周辺』の芸能」：宮良高弘編『日本文化を考える』所収、1993年、第一書房）。

滞した伊是名島から、舟で数分の伊平屋島にある「くまや洞くつ」という、「天岩戸」ではないかとも言われる洞窟の静謐な空間を案内され、私や後輩たちは強い印象と感銘を受けた。後刻、皆で話していたときだったか、先生は「僕はどうも遺跡とか聖地とかいった‘場所’に感銘を受けるってことがないんだよね」とおっしゃった。そして「僕が一番今回感動したのはね」と話し始められたのが、あの文章に書かれた、われわれ一行が夕食に招かれたお宅のお子さんが、おじいさんの演奏する三線で琉球古典舞踊を舞い始めるその瞬間のエピソードだった。どんな時も、どんなところでも、音楽の立ち現れる一瞬を決して見逃さない先生であった。

大学院に進学することを決意したのも、このゼミで多くのことを先生に教わり、もっと勉強したいと思ったからだった。しかし当時の教育大学に大学院はなく、私は東京学芸大学の大学院を受験して進学した。その後も谷本先生には何かと相談に乗っていただいた。

大学院を修了した後は、東京で就職先もなくアルバイトで生活しながら奨学生留学の機会を狙っていた（結果は敗れたが）。先生に推薦状を書いていただいたこともあった。ある日、先生からの絵葉書が届いた。「『果報は寝て待て』といます」などと短く書かれた裏には、巨大に寝転んで腕枕の「臥仏寺の臥仏」（中国のお寺の寝仏らしい）。先生のユーモアが、妙に私の‘笑いのツボ’に入った。ひとしきり笑い転げたあと、私はこの絵葉書を下宿の壁に飾った。

さりげなくて軽妙洒脱で、心に沁みるありがたい励ましであった。

谷本先生は大のキュウリ嫌い、漬物嫌いでも有名だった。‘キュウリの漬物’などは大嫌いの二乗、先生にとっては悪魔の食べ物、いや食べ物の範疇に入れることすらお嫌だったかもしれない。アラスカでの調査で、キュウリのピクルスしか食べ物がなかったときのことを「切ない日々であった」とご著書にも書かれている（『オーロラの下に生きる人々』2009年、共同文化社）。先生が以前いらしたロシアの調査地でも「タニモトサン、キューカンパ、<sup>ニモット</sup>ダメ」と懐かしそうに語られている



フィンランド、ヘルシンキ市街にある映画「かもめ食堂」の舞台となった店の前で（2007年6月、中田篤氏撮影・提供）

のを耳にしたことがある。あの徹底したキュウリの排除ぶりに、思わず微笑ましい気持ちになる人は多かったと思うが、ご本人は「冗談じゃない、笑い事じゃない」と渋面だった。「(キュウリという)単語をしゃべるだけでもイヤだ」というのは相当である。心底お嫌いだった。

何かを食べながら「故人の好物だった」と偲ぶことはよくあろうが、今私はキュウリを食べるたび「先生はこれが心底、徹頭徹尾、お嫌いだったなあ」と懐かしく思い出す。あの嫌いぶりを2年間目の当たりにしたゼミ生は皆、私と同じように思い出していることだろうと思う。

アイヌ音楽の研究の集大成である大著『アイヌ絵を聴く 変容の民族音楽誌』（2000年、北大図書刊行会）を執筆していらした頃は、私の勤務する北海道立アイヌ民族文化研究センターの所長でもあった。ほとんど毎日、ときには休日でも出勤して執筆されていた。たくさんの資料が机の上に広げられ、たくさんのファイルが窓際に並べられていた所長室の光景が思い出される。

時々お茶を飲み、所長室の外に出ていらして、ちょっと微笑み、それからちょっとため息をついて「飽きてきた…」と呟かれていた。先生はしかし、気分転換のお上手な方でもあった。職員と雑談し、しばらくのんびりしてはまた所長室に戻り、執筆を再開される。静かに持続する緊張感が伝わってきた。

刷り上がったご著書を拝領して、しばらくたった頃だった。「(あの本は) どう？」と先生が感想を求められた。先生がご自分のお仕事についてお尋ねになるのはわりと珍しいことだった。突然だったので私はしどろもどろに何かをしゃべって一人で冷や汗をかいた。すると先生は、ちょっといたずらっぽい笑いを浮かべておっしゃった。

「あれはね、実をいうと、探偵小説の手法を使って書いたんだ」(‘推理小説’でも‘ミステリー’でもなく古式ゆかしい‘探偵小説’という語が使われた)。

一瞬キョトンとして先生を見ると、先生は実に嬉しそうに、ちょっと自慢げに、ニコニコと笑っていらっしゃった。

向こうの世界でも、おそらく先生はじっとしてなどおられず、目覚めたとたん精神的にフィールドワークに出かけられていることだろう。先生は調査に出られたから今はご不在なのだ、

と思っていた。だが、旅先からの葉書も、わくわくするみやげ話も、思考の緊張を解きほぐしてくださる心に残る一言も、もう現世では誰もいただくことができないのが、とても、とても、悲しい。

#### 追記

先生より受けた学恩、ご助言、ご厚情に、ついに私は何一つ実のある形でお返しできずに終わってしまった。元ゼミ生としての個人的な思い出を、こうした学会誌に綴るのはどうにも気が引けたが、先生を懐かしく慕わしく思い出される会員の方々と今一度哀悼の意を共有できたらと思い、身を縮めながら記すことをお引き受けした。どうかご寛恕ください。

\* この時の講演内容は下記に収録されている。

『知里真志保 アイヌの言霊に導かれて』（2010年、知里真志保を語る会編、クルーズ）pp.152-158

（こうち・りえ／北海道立アイヌ民族文化研究センター）